

解答はすべて解答用紙に記入すること。

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合で、一部表記を改めた箇所があります。）

自分は大人であると胸を張って言えるひとが、わたしたちの社会にどれくらいいるだろう。大人であるというのがどういうことか、それを子どもにきちんと説くことのできるひとが、いったいどれくらいいるだろう。

わたしたちの生きているこの社会は成熟した社会なのか、それともただの幼稚な社会なのか。そんな問いを立てたくなるような状況がある。とくに何かの技量を身につけることがなくてもなんとなく生きてゆける、自活できなくても「一人前」にならなくても、まあそれなりに生きてゆける……。大半のひとがそのように感じながら生きてゆける社会は、セイフティ・ネットがほんとうに完備しているならばの話だが、たぶん成熟しているのだろう。とすれば、「一人前」にならなくても政治にかかわれる、経営もできる、そんな社会こそもっとも成熟した社会であると、皮肉まじりに認めるよりほかないのだろうか。

《 中略 》

そもそも「大人」、つまりは成熟した市民になるといえるのはどういうことだったのか。

いわゆるクレイマー³の存在がクローズアップされるようになって久しい。難癖のような文句をつける、しつこく苦情を述べ立てる、リンチのような責任ツイキョウ^Aをする……。これをただちに、消費者の、あるいは市民の、権利意識が高まってきたしるしだと言うのは早計である。わたしにはこれは、言葉の攻撃性とは裏腹に、とても受動的な姿勢に映る。社会サーヴィスを提供する者たちに、クレイマーは「わたしたちをもっと安心してサーヴィス・システムにぶら下がっていられるようにせよ」と言い張っているようにしか見えないからだ。苦情をぶつけるだけでみずから問題解決に取り組もうとはしない。こうした光景を、いつでもだれかがそれぞれの場所できちんと務めを果たしているはずだという「相互信頼の過剰」から、何か不全が起こるといつもみんなが「X」しようとするという「相互不信の過剰」へと時代が反転しつつある、というふうに表示したひともある。それにしてもひとびとはいつからこうも受け身な存在になったのだろうか。

出産すること、食材を調達すること、調理すること、排泄物^{はいせつ}を処理すること、治療すること、看病すること、育てること、教えること、介護すること、看取ること・葬送すること、これら生きてゆくうえで一つたりとも欠かせぬことの大半を、ひとびとはいま社会の公共的なサーヴィスに委託している。医療機関に、学校に、行政サーヴィスに、福祉サーヴィスに、あるいは外食産業に、流通業者に、公益業者に。とどのつまり、社会システムからサーヴィスを買う、**a** 受けるのである。

「生老病死」と言われるいのちのベシックス^Bは、現代社会ではこのように、公共的な社会システムが面倒をみるようになっており、そのプロのサーヴィスに税金を、あるいはサーヴィス料を支払うことで、安心して暮らせるようになってきている。寿命は大きく伸び、子どもたちも高学歴になり、いろんな面で安心・安全がきちんとホシヨウ^Bされる社会になってきている。これは福祉の充実（安心と安全）と世間では言われるが、しかし、裏を返して言えば、これは各人がこうした**Y**を一つ一つ失ってゆく過程でもあるのではないだろうか。

じっさいこれら「生老病死」の世話は、ほんの数十年前までは、家族のなかで、あるいは近隣住民のあいだで、協力してなされてきた。出産も介護も治療・看病も看取りも、さらには調理、排泄物処理、子育て、教育、葬儀も、ほとんどが自宅もしくは地域住民によって担われてきた。ところが社会サーヴィスの充実とともに、これらのプロセスをひとはプロのサーヴィスに委託するようになった。しかしそうしたサーヴィス・システムが完備してゆくなかで、みずからの手でそれらをおこなう能力を失っていった。調理、医療、教育だけではない。かつては地域にもめごとが起こったときも、だれかがその**チュウサイ**^Cにあたり、なんとか事をおさめていったものだが、そういう問題解決の能力、ひとびとのあいだに合意をとりつけてゆく能力もわたしたちは失ってしまい、何ごとも役所や弁護士に任せるありさまである。

サーヴィス社会はたしかに心地よい。**b** 先に挙げた、生きるうえで欠かせない能力の一つ一つをもういちど内に回復してゆかなければ、脆弱なシステムとともに自身が崩れてしまう。昨今ひんぱんに起こっている違法建築やギソウ^D表示などの不正や不祥事は、そうしたシステムを管理している者の責任感の**欠如**^Eぶりを表に出した。ナイーヴなまま、思考停止したままでいられる社会は、じつはとても**危うい**^F社会であることを浮き彫りにしたはずなのである。それでもひとびとはまだ外側からナイーヴな糾弾^{きうたん}しかない。そして心のどこかで思っている。いずれだれかが是正してくれるだろう、と。だがじっさいには、**コウギ**^Gと弁明ばかりで、だれも責任をとろうとしない。

ひとびとが幼稚なままで生きてゆける社会とは、ひとびとがそうしたサーヴィス・システムに身をあずけたままの社会のことである。が、それはリスクの高い社会でもある。じっさい、震災のような大規模な危機に直面したとき、わたしたちは「生老病死」の世話の能力をその基本のところで見失っていることを思い知らされる。ライフラインが切断されて飲み水もないときに、目の前を流れる川の水を飲めるように処理もできず、わたしたちはただ飲料水を含む救援物資の到着を待つことしかできなくなっている。そう、はなはだしく無能力になっている。近年のそうした被災の経験は、見えない社会システムに生活をそっくり委託するのではなく、目に見える相互のサーヴィス——他者に心をくばる、世話をする、面倒をみる——をいつでも交換できるようにしておくということが、起こりうる危機を切り抜けるためにはいっばん大事なことでと告げていたはずなのである。

4 市民としての基礎的な能力の喪失、この背景にあるのは、専門家主義もしくはサーヴィス・エコノミーと呼ばれる社会の仕組みである。食事の準備（食材の購入、調理）、子どもの世話・教育、看護、介護、冠婚葬祭……といった、本来家族相互、住民相互のケアというかたちで維持されてきた生活プロセスのほぼ全面が、サーヴィス機関もしくは業者に委託されるようになった社会の仕組みである。わたしたちは、メディ・ケア（医療サーヴィス）、ソーシャル・ケア（福祉サーヴィス）[※]ジュディ・ケア（法曹サーヴィス）さらにはサイコ・ケア（メンタル・サーヴィス）というふう⁵に、専門家による「生老病死」の世話がシステムティックになされる社会に生きている。

さまざまの「プロ」によってシステムティックになされるこれらのサーヴィスは、クライアント（顧客）のニーズに応える仕事としてなされる。こういう感覚の危うさについては、ジョン・マックナイトというイリイチ派の思想家が次のように指摘している。ここには三つの思い込みがある。一つは、ニーズが何がしかの欠陥と考えられている。第二に、その欠陥が個人的なものとして理解されている。第三に、専門家によってニーズは細分化され、そして市民には理解できない言語へと暗号化される。ここでは、「あなたが問題である以上、専門化されたサービス担当者である私が、解答者なのである。あなたは解答者にはならない。あなたの仲間たちも解答者ではない。（……）専門家である私こそ解答者なのだ。（……）専門家である私は生産する、顧客のあなたは消費する」というわけだ。

こうした専門家のサーヴィスを、生活の安心・安全と引き替えに（そして税金・サーヴィス料の支払いと交換に）一方的に受ける。市民は「サーヴィスの顧客」に成り下がるのである。市民はこうして受動的になる。つまり、専門家サーヴィスとは「ひとを無能力(Dis-able)化する援助」となる危険を孕んでいるということだ。システムはだれかが支えなければならないのに、クレマーは自分がシステムの外にいて思っている。そうした勘違いもこうした背景から生まれる。市民（シテイズン）であるはずのひとびとが、サーヴィスの「顧客」もしくは「消費者」とみずから勘違いしている。このところ、まちににぎわいを取り戻すとしてさかんに「集客都市」というコンセプトが語られるが、都市における市民はお金を落とす「客」ではなく、まずはまちを運営する「主」であること、このことを、市民は、そして行政もしくは都市プランナーは、このサーヴィス社会に溺れて、忘れ果てているのではないか。

成熟とはまずひとつとして自活できるということであろう。食べ、飲み、衣をまとい、居場所をもち、仲間と交際することが独力でできるということ、つまりは自分で自分の暮らしをマネージできるということであろう。もつともひとは生活を他のひとと協同していとむという意味では社会的なものであつて、だから成熟とは、より正確には、社会のなかで自分たちの生活を自分たちでマネージできるということである。（鷲田清一『わかりやすいはわかりにくい？』より）

（※注）セイフティ・ネット：個人や社会の中で起こりうる様々な危険に備え、その危険を回避するために用意された様々な仕組みやサービス。

サーヴィス：「サービス」と同じ。

ナイーヴ：素直で素朴なさま。

イリイチ：オーストリアの哲学者。

マネージ：物事をとりまとめ、管理すること。

委託：まかせること。

糾弾：責任を問いただし非難すること。

ニーズ：商品やサービスに対する顧客の要求。

ベーシックス：基本的なものと。

システムティック：体系的、組織的であるさま。

問一 —— A 「ツイキユウ」、B 「ホシヨウ」と同じ漢字が用いられている熟語を選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | |
|-----------|------|------|------|------|
| A 「ツイキユウ」 | ア 探究 | イ 求職 | ウ 及第 | エ 窮乏 |
| B 「ホシヨウ」 | ア 証書 | イ 障害 | ウ 賠償 | エ 賞状 |

問二 —— C、G について、漢字は読み方をひらがなで答え、カタカナは漢字に直し、楷書で書きなさい。

- 問三 空欄 a、b を補うのに最も適切な言葉を選び、それぞれ記号で答えなさい。同じ記号を二度用いてはいけません。
- | | | | | |
|--------|--------|--------|-------|-------|
| ア あるいは | イ そのため | ウ けれども | エ そして | オ しかも |
|--------|--------|--------|-------|-------|

問四 空欄 X、Y を補うのに最も適切な言葉を選び、それぞれ記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|--------|--------|--------|--------|
| X | ア 試行錯誤 | イ 責任転嫁 | ウ 一致団結 | エ 孤軍奮闘 |
| Y | ア 信頼関係 | イ 利害関係 | ウ 潜在能力 | エ 自活能力 |

問五 —— 1 「皮肉まじりに認めるよりほかないのだろうか」とありますが、筆者が「皮肉」といつている理由としても最も適切なものを、次より選り記号で答えなさい。

- ア 「二人前」の人が形成する社会が成熟した社会といえるはずなのに、逆に社会が成熟していることで人が一人前でなくても生きていくことができってしまうから。
- イ たとえ「一人前」になつたとしても、大人になるということがどういうことなのかについて、子どもに説明できる人がほとんど存在しないから。
- ウ わたしたちの生きている社会が成熟した社会なのか、幼稚な社会なのかという問いに対して、「一人前」の人でさえも解答を導くことができていないから。
- エ 成熟した社会にはセイフティ・ネットがあるため、「一人前」ではないはずの人が、自分は「一人前」であると思いがつてしまうという弊害が生じるから。

問六——2「成熟した市民」とありますが、「成熟した市民」に必要なのはどのような能力であると述べられているか。「〜能力」に続くように、本文中より三十字以内で抜き出しなさい。

問七——3「クレーマー」とありますが、筆者はクレーマーのような消費者の態度を、どのような態度であると見なしているか。

「〜と見なしている。」という形式で、分かりやすく説明しなさい。

問八——4「市民としての基礎的な能力の喪失」は、何が原因で起こるのか。本文中の表現を用いて、分かりやすく説明しなさい。

問九——5「ジョン・マックナイトというイリイチ派の思想家」とありますが、この思想家の例を用いることで筆者が言おうとしていることは何か。最も適切なものを、次より選び記号で答えなさい。

ア クレーマーがシステムの外側から文句を言っている現状を改善するためには、クレーマーにも「顧客」であるという意識を持たせる必要があるということ。

イ 現在のシステムでは、市民は専門家のサービスなしにはニーズを満たせないと思い込みやすく、それによって受動的な「顧客」になる危険があるということ。

ウ 現代の複雑化するニーズに応えるには、市民には理解できない専門的な知識が必要であるため、今後も専門家のサービスによる援助が不可欠であるということ。

エ 「専門家」と「顧客」の区別をなくし、両者が協力して都市をつくっていくことで、クレーマーが存在しなくなり、都市の集客力も上がっていくということ。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合で、一部表記を改めた箇所があります。）

「佐古葉子」は、小学生の時、互いに絵を描くことが好きであることから、同級生の「しおり」と仲良くなり、親友だと感じていた。しかし、中学校入学を機に活発で派手な印象の「朱里」のグループと行動を共にすることが多くなり、大人しく控え目なしおりとは次第に疎遠になっていった。中学では美術部に入りたいと考えていたが、美術部が地味な印象を持たれていることを知った葉子は、朱里のグループに馴染めなくなることを恐れ、結局入部しなかった。一方で、将来、画家になりたいという志を持ち、美術部に入部して絵を描き続けているしおりを、葉子はひそかにまぶしく感じている。そんな中、葉子、しおり、朱里はクラスメイトの「山村」「百井」とともに、体育祭の応援旗（おうえんき）を作ることになった。

「おーい、朱里ー！」

人気（ひとけ）のない、五人きりの教室の中に、朱里を呼ぶ**甲高い**声Aが響き渡る。

手を止めて顔を上げると、ドアの向こうから背の高いショートボブの女の子がぶんぶん手をふっていた。¹数秒前まで不機嫌そうに、パレットの上でペタペタと絵の具を溶いていた朱里は、とたんに顔をぱつと輝かせて、「ちーちゃん！」と、その子に駆け寄っていく。

——ああ、まただ。

のど元にこみ上げた苦い感情を、ため息とともにのみ下す。だけど、心はざらりと毛羽立ったまま、ちっともおだやかにはなれなかった。きやははは、と廊下から聞こえてくる朱里たちの笑い声が、やたらと耳にさわる。

今日で、応援旗製作を始めてから六日目。

だけど、朱里がまともに活動に参加していたのは、最初の二日——いや、二日目も途中で帰ってしまったから、初日だけ、だった。「あつれー？もしかして朱里も応援旗で残ってんの？」と、隣のクラスの女子が、ひよっこりとうちのクラスの教室をのぞきこんできて言ったのは、今から、三日前のこと。どうやら朱里と同じバスケット部の子だったらしく、以来朱里はこれ幸いとばかりに、**レンジン**^B、隣のクラスに入り浸るようになってしまったのだった。

——なんか……なんかやだ。こういうのって、すげ〜。

心の奥でつぶやいて、私はぎゅつと奥歯をかみしめる。思っているだけじゃなくて、実際に言わなくちゃいけないんだ、と分かってはいるけれど、隣の教室へ踏み込んでいって、朱里を連れ戻すことを考えると、どうしても **a** がすくんだ。もしかすると、私の煮え切らないところを、朱里は「やさしい」と言ったのかもしれない。

「葉子、大丈夫？」

私がよほど険しい顔をしていたんだろう。おずおずとしおりが話しかけてきて、私はようやく、はっとわれに返った。

「……うん、平気」

かろうじて笑顔を返すと、しおりも、ほっとしたように目元をゆるめた。

しおりとは、早朝の教室でしゃべったのをきっかけに、じよじよにはあるけれど言葉を交わすようになっていた。ぎこちなさはまだ完全に消えてはいないし、しおりのほうに壁を感じることもときどきある。だけど、「葉子」としおりが呼んでくれるようになったことだけで、今は十分にうれしかった。

それに――絵を描くことは、やっぱり、すごく楽しかったんだ。

普段はめったに使わないような大きな刷毛^{はけ}で、思い切り、まだ白いところをすうつとなぞる。そうすると、心にあったもやもやも、自分のふがいなさも、全部ぜんぶ、ざあつと流されていくような気がした。百井さんと松村さんは、細かい作業が苦手なようで、細筆を使って描くところは、私としおりのふたりでやった。息をつめて、筆先に集中して、**ティネイ**^Cに色をつけていく。そうして、ふうつと息を吐いて筆先を持ち上げる瞬間は、急に視界が広くなって、清々^{すがすが}しい気持ちになれる。

作業を終えて、片付けをしている時に、

「だいぶ、進んだね」

と、うれしそうに百井くんが言った。「頑張れば、明日か明後日には完成するんじゃないかなあ」と松村さんがあいづちを打ち、私としおりも、笑顔でうなずく。応援旗を見下ろせば、パステルカラーの空の中に、まだ白のままのクジラのシルエットがくつきりと浮かび上がっていた。

――どうか無事に、この絵が完成しますように。

祈るようにそう思いながら、私はそつと、教室のドアを閉める。

事件が起きたのは、その翌日のことだった。

午後四時。外は、まだずいぶん明るくて、グラウンドからは野球部の掛け声が、中庭からはトランペットの音色が響いている。作業を開始してまだ十分しか経っていないこともあって、その時教室にはまだ、朱里も含めた応援旗係全員が顔をそろえていた。

そんな時、それは起こった。

「あ」

ぼつ、と目の前で鮮やかな赤色の絵の具がしぶきのように散ったのと、松村さんが短い悲鳴を上げたのは、どっちが先だったんだろう。

――嘘。

気づいた時には、背景の空の上に、赤い絵の具が点々と散っていた。**フキ**^Dとる間もなく、赤い絵の具はすうつと吸いこまれるようにシミになっていく。目の前には、赤く染まった筆をパレットに置いて、青ざめた顔をした松村さんの姿があった。

「ごめん！ごめんさい……」

一瞬、しん、と静まり返った教室の中で、だれよりも先に声を上げたのは、松村さん本人だった。今にも泣きだしそうな顔で、「どうしようどうしよう」とうろたえている。

実際、これはまずいかも、というの、私自身も思ってしまったことだった。

上から塗り直したって、背景の色が薄いぶん、どうしても派手な赤色のほうが浮き出てしまう。ごまかそうとしても、かえって悪目立ちしてしまいそうだ。だけど今は、涙目になっている松村さんを責める気にはなれなかった。

大丈夫だよ、なんとかなるよ――！

そうフォローの言葉を口にしようとした。けれど、その時だった。

「えー、超目立つじゃん。どうすんの？これ」

ロコツな物言いにぎよつと顔を上げると、さつきまで**手持ちぶさた**^①にしていた朱里が、すぐそばに立っていた。きれいに整った眉をひそめて、応援旗を見下ろしている。

「あ、でも、上から塗り直せば……」

おずおずと、百井くんが言いかける。

けれどそれを朱里は、「や、そこだけ塗り直しても、かえって目立つでしょ」とあっさり**一蹴**^Eした。その一言に、松村さんはさらに耳を真っ赤にして、「ごめんさい……」とうつむいてしまう。しおりが手を当てた松村さんの肩は、すでに、泣きだす寸前のように小さく震えている。

――なんで？ 朱里……。

思わず隣をふりあおぐと、朱里はもう他人事^{ひとごと}みたいにつまらなそうにそっぽを向いていた。その瞬間、私の中で、何かが弾けた。

「朱里」

口を開くと、思ったよりも低い声が出て自分でも驚いた。

朱里が、**おつくうそうに首**^②をもたげて私を見る。その視線にひるみそうになったけれど、私は、構わずに口を開く。

「……なんで、そういう言い方するの。それに、ずっとサボってたじゃん、朱里。こんな時だけ責めるのって、おかしいよ」
言った。言ってしまった。

b を打ったような静けさの中で、カツン、と時計の針が動く音がした。しおりの、そして百井くんと松村さんの視線をひりひりと肌に感じる。怖い。怖くてたまらない。

「……何ソレ。なんであたしが、悪者みたいになってんの？」

抑揚のない声で言って、朱里がカバンをつかむ。そしてポニーテールを揺らして、私をまっすぐに見た。少し前まで「葉！」と笑いかけてくれていた、勝ち気な猫みたいな瞳。でも今そこにあるのは、以前のような親しみじやなかった。

※ひなた
「日向」と「日陰」の境界線。それを朱里がたった今、私の前に、完全に引いたことが、はっきりと分かった。

「……もういい。帰る」

そう吐き捨てると、ふり向きもせず、朱里は足早に歩いていってしまった。² その背中を視線だけで追いかけているが、私は、そっと目をふせる。

泣きたかった。

だけど、泣かない、と思った。

だって、私は今、朱里に本当の気持ちを言った。そのことに、後悔はなかったから。

ゆっくりと深呼吸してふり向くと、しおりと最初に目が合った。心配そうなそのまなざしに、大丈夫だよ、というふうに、私はうなずいてみせる。

「佐古さん……ごめんなさい。私のせいで」

目を赤くした松村さんに、私はううん、と首をふった。それは、本当の気持ちだった。³ 私と朱里が衝突したのは、絶対に、松村さんのせいじゃない。

「……だけど、どうしようか。これ」

と百井くんがつぶやいて、私たちは改めて、赤く散らばったシミを見下ろした。

淡い色が混じり合った^Fゲンソウ的な空の中に、点々と散った鮮やかな赤。たしかに、そこだけ見れば、違和感はある。だけど、なんて鮮やかなだろう。

そう思った時、⁴ ぴんと心にひらめくものがあった。そうだ、初めてしおりと出会った日、私たちの間を吹き抜けていった風と、ひらめく花びらと――。

「……花」

ぼつんとこぼした私のつぶやきに、三人が、いっせいに顔を上げる。

「花？」

首をかしげるしおりに、私は大きくうなずいた。

「そう。隠すんじゃないくて、デザインの一部にするのってどうかな。空に花びらが舞ってるようなイメージで全体に描きたして。そして、遠目からでも華やかに見えるし……」

そこまで言った時、みんなの視線が私に集まっているのを感じて、はっとした。遅ればせながら恥ずかしくなって、かっとながほてる。どうしよう。もしかして、おかしいことを言ってしまったらどうか――。

けれど、その時。

「いいと思う。すごく」⁵

え、とまばたきをする私の前で、しおりがまっすぐ私にほほえみかけて言った。

「やろうよ、それ」

(水野瑠見『十四歳日和』より)

(※注) 朱里は「やさしい」と言った：以前、しおりと仲良くしたいと葉子が朱里に告白した際、「やさしいんだね。だれにでも」と皮肉を言われたことがある。

「日向」と「日陰」：葉子は以前から学校の中で目立つ人は「日向」に、目立たない人は「日陰」にいると捉えていた。自分自身は、小学校までは「日陰」にいたが、中学校で朱里のグループに入ったことで「日向」にいるようになったと感じている。

問一 ―― A～Fについて、漢字は読み方をひらがなで答え、カタカナは漢字に直し、楷書で書きなさい。

問二 **a** **b** に当てはまる最も適切な語を、漢字一文字でそれぞれ答えなさい。

問三 — ①「手持ちぶさたにしていた」、②「おっくうそうに」の意味として最も適切なものを、それぞれ選り記号で答えなさい。

- 「手持ちぶさたにしていた」
- ア 自分勝手に遊んでいた
 - イ 何もせず暇そうにしていた
 - ウ 熱心に手で作業をしていた
 - エ 手伝おうか迷っていた
- 「おっくうそうに」
- ア 煩わしく気が進まない様子で
 - イ くだびれて弱々しく
 - ウ 怒りをあらわにして
 - エ よそよそしく冷淡に

問四 — 1「数秒前まで不機嫌そうに、パレットの上でぺたぺたと絵の具を溶いていた朱里は、とたんに顔をぱっと輝かせて」とありますが、朱里がこのように表情を変えた理由を、「ちーちゃんが来たことごとくと考えたから。」という形式で説明しなさい。

問五 — 2「その背中を視線だけで追いかけてながら、私は、そっと目をふせる」とありますが、この時の葉子の心情として最も適切なものを、次より選り記号で答えなさい。

- ア 自分を制御しきれず朱里にきつく言いすぎてしまったと心苦しく感じ、どうにか朱里の怒りを解いて以前のような関係に戻れないだろうかと思案している。
- イ 朱里に以前のような親しみを取り戻してもらい、他のメンバーと打ち解けてもらおうと尽力してきたのに、険悪な雰囲気になっってしまった胸を痛めている。
- ウ 朱里が自分を拒絶したことにショックを受けてはいるものの、朱里に本当の気持ちを言ったことは決して間違っていないからと自分に言い聞かせている。
- エ 朱里の勝手な言動によって、これ以上不愉快な思いをせずに済むと思っただけのもの、朱里から今後冷たくされること予想され、不安に襲われている。

問六 — 3「私と朱里が衝突したのは、絶対に、松村さんのせいじゃない」とありますが、これを具体的に説明した次の文章の空欄に入る表現を考え、それぞれ答えなさい。なお、同じ記号のところには同じ表現が入ります。

確かに ことがきっかけとなり、葉子は朱里と衝突した。しかし、 時よりも前から、葉子は朱里が ことを不満に感じていた上に、葉子自身の意志で ので、松村さんが気にすることはない。

問七 — 4「ぴんとひらめくもの」とありますが、どのようなことをひらめいたのか。本文中の表現を用いて、分かりやすく説明しなさい。

問八 — 5「え、とまばたきをする私」とありますが、この時の葉子の心情を、そのような心情になった理由も含めて、分かりやすく説明しなさい。

問九 本文における叙述の特徴を説明したものととして、最も適切なものを次より選り、記号で答えなさい。

- ア 心情を直接表現する語は少ないが、人物の行動から心情変化を読み取ることができる。
- イ 様々な登場人物の視点を通して状況を語ることで、複雑な人物関係を描き出している。
- ウ 対句などの技巧的な表現によって、登場人物の心情や情景を印象深く表現している。
- エ 擬音語や擬態語、比喩などを用いることで、場面が具体的に想像しやすくなっている。